

資料展示「ヒロシマに挑む」および特別展示「秀敬氏資料」について

広島大学原爆放射線医科学研究所附属被ばく資料調査解析部 助教 久保田 明 子

1. カタカナのヒロシマ：

「ヒロシマという字はいやな字だわ」

「誰かが云つたんだけど」

島崎が形を崩さない適度な硬さで、軽く笑い、
「この街では片カナでヒロシマと書く『ヒロシマ』が出来つつあるんで、復興ではない——」

「そう。私もそう思うんですよ。復興とは別なものです。ヒロシマという字はいやな字だわ。」

(大田洋子「夕風の街と人と：
一九五三年の実態」より)

カタカナで書く「ヒロシマ」という言葉には、現在、その意味や想起されるイメージが複雑になっており、とらえにくい。そもそも言葉と言うものの自体が時代の変化とともに意味や使い方が変わるものであるため仕方がない部分もある。しかしながら一方、変化を容認しつつも、原義を忘れてはならない言葉もあると考える。その一つが、原爆投下が無ければ生まれなかったであろう「ヒロシマ」という言葉と概念であろう。そして、当然ながら同様の意味で「ナガサキ」も然りであり、また、あの日から現在10年あまりとなる「フクシマ」も同じ流れを持っている部分もあるのかもしれない。これは、本拠点による現在の研究発展とは直接には無関係であろうが、ちょうどこの3つの地域をつなぐ拠点の存在意義を考えるとときは重要なコンテキストだ。

このカタカナ表記の地名は、短いがイメージを読み手に伝えるのに便利だ。例えば前段で「あの日から10年あまりとなる「フクシマ」と書いたが、それだけで多くの人々は、東日本大震災や福島第一原発事故、またそれに関わる様々な事象を

想起することが今のところできる。

また、被爆75年を期して、プリンストン大学から論文集“The Age of HIROSHIMA”が刊行されたが(<https://press.princeton.edu/books/hardcover/9780691193458/the-age-of-hiroshima>)、このタイトルを、内容を尊重して日本語に直接的に訳した場合は「ヒロシマの時代」となるのかもしれない。ただ、以上のような場で使うとき、言葉の感触としては、非常に厳しい状況に立たされている人々、大きな被害、立ちはだかる数々の問題を包括するネガティブを秘めている。プリンストン大学の本のテーマは、原爆とその後の時代である。また筆者は、福島で調査研究をされている長崎大学の先生に「福島では「フクシマ」という言葉はいやがられるんですよ」とご経験からの知見を教えていただいたことがある。

一方で現在、様々な場で、この「ヒロシマ」はもっと容易に広い意味をもって使われ、特に被爆75年の広島では多く目にする。例えば広島大学では、学生・留学生らによる「2020年学生ヒロシマ平和宣言」を発表したが(<https://www.hiroshima-u.ac.jp/news/59630>)、説明によれば「原爆、紛争、貧困、平和構築などをテーマに「平和とは何か」という問題に向き合い、そこから教訓を得ること、そして核兵器廃絶、非暴力の未来を描いていくことを目的」としたサミットを開催して採択したとのことである。つまり、地名(地域名)という基本事項のほか、平和や核廃絶まで、広く含んでいるようだ。

しかし、本資料展示での「ヒロシマ」はそういった意味ではない。違う。沿おうとしたのは、冒頭にあげたような、大田洋子などが示す原義的な意

味と、その思いである。

引用した一文は、原爆文学の重要な作家、大田洋子（1906-1963）の作品の一節である。「島崎」とは中国新聞の記者の設定であるが、彼は、原爆や核の問題に取り組み続け、「原爆白書運動」を提唱し、大江健三郎をして「真に激昂している日本人」と言わしめたジャーナリスト・金井利博（1914-1974）がモデルとなっている。彼の言葉に「そう」と答えているのは物語の中心人物・小田篤子であるが、彼女は大田自身が投影されており、その点、これは大田や金井の実際の思いではないかと想像もできる。この本の設定は、原爆投下から10年足らず、日本が独立してまもない1953年の広島である。そこには、敗戦、占領、そのうえに「ヒロシマ」という、非常に厳しい現実が隔々まで広がっており、人々は明らかに、逃げ出すことができないそれらに対して嫌悪感をもっていたはずである。

しかし広島の人びとは、眼をそらせない、嫌悪するその「ヒロシマ」に立ち向かう。今回はそういった営みのなかで、科学者の「ヒロシマ」に挑む姿を発信したく、展示の名称を「ヒロシマに挑む」とした。

2. 資料展示「ヒロシマに挑む」

2-1. 展示企画の経緯

もともとの企画は、「ヒロシマ」に挑み治療や研究を行った医学の動きに焦点を当てるものであった。1959年、原爆投下から10年以上たったところで、原子爆弾後障害研究会が初めて開催された。このことは、放射線の深刻な人体影響が長期にわたること、その治療や研究も長期的なスケジュールを組む必要があることを既に如実に語っている。その証拠に、2019年、この研究会は60回を数えた。そういった周年を意識して、では、第1回の1959年まではどうであったのか、とい

うことを軸に、広島大学医学部広島市移転完了の1957年、原医研設立の1961年といった経緯に留意して、被爆直後からの医者動きから追いかけて、「救護」、「治療」、そして「研究」へ、という発展の初期段階を見ることとした。但し、展示が可能な資料の原本はわずかであったため、パネル展示や文献に重きを置いた。

そんななか、2019年4月の『中国新聞』で、広島大学の地質学教室による被爆直後の調査ノートの原本が広島大学文書館で再確認されたことが報道された（2019年4月22日『中国新聞』朝刊掲載記事「被爆直後 岩石研究ノート

広島大に保存」（山本祐司記者）<http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=90444> 参照）。この報道を受けて、学内から、この地質学調査資料の展示も「特別展示」として一緒に公開してはどうか、との提案を受け、了承した。理由は以下2点である。

（1）広島市内で展示する意義

当時の広島大学地質学教室は広島市内（東千田キャンパス）にあったが、現在、資料が収蔵されている広島大学文書館は広島大学の旧本拠地でもあった東千田から遠い東広島市のキャンパスにある。展示提案の際に示されたのは、再発見されたこれらの資料を、被爆地でもあり、もとの教室のあった広島市に「お里帰り」させて、この8月に広島市の皆さんに広く見ていただければどうか、ということだった。こういった話題性のほか、資料のもともとの由来の地で展示を行うということは、地域発信の資料展示の点で重要であると考えた。

（2）大学の歴史的資料を総合的・複合的に展示する意義

毎年実施しているこの資料展示のシリーズは

「医学」をテーマにしており、広島大学医学部および原医研の活動に重点を置いている。そのため、地質学資料の展示については異質な印象となる心配もあった。しかしながら、大学としての歴史的事実の発信（この当時、広島大学では医学部だけではなく、幅広く原爆の実相究明に取り組んだ、という事実の発信）の役割もあると考えた。また、この地質学教室の資料をもとにされた研究は、のち、放射線の線量の推定の議論にも影響があったとされている。そのため、必ずしも、のちの放射線防護の問題、医学の問題と無関係とは言いきれない、とも考えた。

以上のことから、地質学教室の原本資料の展示を「特別展示」と位置付け、もともとの企画である医学に関する展示と同時に開催することとした。

2-2. 展示構成

展示は、基本の医学分野の展示と、地質学分野の特別展示の2部構成とした。展示室が1室であるため、物理的に2区域に分割し、入って右回りで医学のパネルと資料を展示し、入って左回りで地質学の資料を展示した。動線が一方方向ではないが、展示室が狭いため、混線などの問題は低いと考えた。

(1) 医学分野…「ヒロシマに挑む」

パネルは以下の8枚でほぼ時系列順に構成した。パネルタイトルも展示タイトルと連関させた。

1. 「ヒロシマという字はいやな字だわ」：広島にとってのヒロシマ
2. 初期の「ヒロシマ」調査：軍とアメリカと日本の調査
3. 「ヒロシマ」に挑む広島の医師たち：原爆投下直後の活動

4. 広島大学と「ヒロシマ」

5. 広島大学医学部の「ヒロシマ」の最初の苦難

6. 医学の「ヒロシマ」に取り組む

7. 原爆放射線医科学研究所

8. 医学の「ヒロシマ」への探求は続く

そして、それぞれに関連する原本資料を、少量ではあるがガラスケースに展示した。例えば、1番のパネルでは大田洋子と金井利博が登場するので、引用した文献や関連書籍を展示し、その一部は来館者が読めるようにした。3番のパネルについては、追加のパネルとして、広島市内から多くの被爆者が地方に避難した動きと、広島市外の多くの地域から医療関係者が広島市内に救護に駆けつけた動きを示す地図を付帯した。また、松坂義正編『被爆者とともに——続広島原爆医療史』に掲載されている、被爆直後に救護に活躍した県内各地の医師の名簿を全員記載した。5番のパネルでは、広島大学医学部の年表を、大学から出ている年史を参考に作成し、展示した。6番から8番のパネルでは、それぞれの運営のなかで生まれていった文献、例えば、『広島医学』の戦後の1巻1号、第1回の原爆後障害研究会の講演集の原本を展示した。

医学分野は総じて、パネルや文献など、文字の多い展示となった。パネルの文字サイズや触って読める文書展示については、落ち着いてゆっくり見られるよう、イスを配置するなど工夫した。

(2) 地質学分野…特別展示「秀敬資料：原爆調査の軌跡」

地質学教室資料は、実際は、その当時学生として所属していた青年・秀敬氏の資料である。秀氏はその後、地質学の研究者となり、広島大学の教授となった。彼の研究者人生の全体の資料は現在、広島大学文書館に保管されているが、今回はその

うち、原爆調査に関する文書資料、

（資料1）〔調査ノート〕「原子爆弾調査」（広島大学文書館所蔵（資料番号 3178））

（資料2）〔調査地図〕「原子爆弾の熱線の及ぼした影響調査図 昭和二十三年六月記入」（広島大学文書館所蔵（資料番号 3178））

の2点をお借りした。

また、広島大学総合博物館（東広島キャンパス）には、このときの秀氏を含む地質学教室の調査の際に採集し、その後教授となった秀氏が保管していた採集岩石を保管している。そこで、博物館にもご協力をいただき、当時採集した資料については、

（資料3）万代橋（よろずよばし）欄干（13-1（451203）広島大学理学部研究科 所蔵／広島大学総合博物館 管理）

（資料4）大手町棧瓦（さんがわら）3-3（45120305）同上

（資料5）護国神社玉石 1-9（AH51.52）同上

（資料6）平瓦のかけら 福屋西 1-1（HK45102708）（ABH）同上

（資料7）タイル 第一銀行（日本勧業銀行）便所 2-1（HK45110406）同上

の5件をお借りした。また、学術研究者がこれらの岩石をどのように活用し保存するのかを示す参考資料として、

（資料8）白神社（しらかみしゃ）コア静間清寄贈／広島大学総合博物館所蔵
の1件もお借りした。

（資料1）と（資料2）は、当時学生であった秀敬氏の旧蔵の調査内容を克明に記した小さいノートと、採集調査の道のりを書き入れた地図である。最終的な日付は1948年6月であるが、内容は、1945年（昭和20年）10月末～12月の初調査と1948年（昭和23年）6月の再調査の内容

となる。ノートには、参加メンバーの名前、広島の街中の地図、どの地点でこういった位置（遮蔽の状況や環境）でどのような岩石（例えば、花崗岩、というような）を採集したか、といった詳細なデータと少しの所見が書かれている。調査は1945年に7回実施されているが、地図にはその7回の経路が線で引かれていた。

ノートと地図はこの機会に、デジタルアーカイブ専門の業者に依頼して、丁寧なデジタル化を実施した。地図については、来館者が触ったり、近くで見られるよう、古紙風の和紙で精密な複製資料を作成した。ノートは、トピックとなるページを拡大パネルにし、簡単な解説を付けた。そのうえで、デジタルデータを印刷してノートの複製を作成し、来館者がページをめくって中身を全部見られるようにした。

（資料3）～（資料8）については、関連論文や博物館の学芸員（佐藤大規氏）のご教示をいただき、素人ながら簡単なキャプションをつけ、ガラスケースに入れて展示した。比較的大きいごつごつした岩石等は、むき出しのまま展示をして体感して欲しいところであるが、資料保全や来館者の安全保護を優先した。

本件はこれまでおこなってきた医学資料と異なる地質学関連であるため、リサーチが十分に行えなかったが、それでも、例えば、秀氏のノート記載の1945年と1948年調査が、日本学術会議の原子爆弾災害調査特別委員会の調査班（調査リーダー：渡辺武男東京大学教授）の随行調査だったことなどが確認できた。また、ノートのいくつかの箇所に「長岡」の名前が見えたが、これは当時地質学教室に所属していた、広島平和記念資料館初代館長の長岡省吾本人であることもわかった。更に、当時の広島大学地質学教室の今村外治教授、小島丈児助教授の動向も少しずつわかってきた。そしてこの、「東大・渡辺教授」、「広大囑託・長

岡氏」、「広大・今村教授」、「広大・小島助教授」そして「秀氏」の人間関係と調査活動が、当時の原爆学術調査の一端を解明する研究テーマともなりうる示唆も得た。

ちなみに、この秀氏旧蔵のノートの調査情報とその後のフォールアウトの影響を受けにくい状態で長年保存されていた被爆岩石は、後年改めて研究がなされ、それが、線量推定方式 DS86 が DS02 に改訂される議論の一端となった、とも言われている。今回の地質学教室資料展示はたまたま中国新聞の記事掲載がきっかけであったが、結果的に、放射線被災の医学研究の経緯にも関与する話が出現することとなった。

3. 反響など

展示開始直前に大学の学長会見で取り上げていただいたこともあって、マスコミには朝日新聞（2019年8月3日）、読売新聞（同年8月11日）、中国新聞（同年8月12日）と取り上げていただいた。その結果、テーマが地味である割に来館いただく方も思った以上に多かった。また、本年より受付部分に一言を添えられる「芳名帳」を配置したが、アンケートよりも書きやすかったのか、多くの方が温かいコメントと共にお名前を記帳してくださった。

医学展示部分は、文字が多くて閲覧のしづらさを懸念したが、比較的じっくり見てくださる方が多い印象であった。例えば、大変小さい字で被爆医療に駆けつけた医師の名前を地名を付して掲載したが、ここの部分を熱心に見て会話される方々を見かけた。恐らく知っている地域の、現在も開業されているお医者さんの名前を見つけたりしたのだろうか、この風景は何回か見かけて印象的であった。また、広島市外から多くの救護のための医療従事者が駆け付けた図に感想を寄せてくださった方も少なからずいた。文献をじっくりイスに腰かけて読み込んでいる方も何度か見かけた。広い会場ではない稚拙な展示ではあるが、逆にその「こじんまり」とした空間で文字情報をゆっくり読む、という滞在しやすい空間となったのかもしれない、とも思った。

地質学資料への反響はやはり大きかった。特に岩石展示について、ガラスケースの前で微動だにしない方も何人か見かけ、ガラスケースの見にくさを申し訳なく思った。ガラス越しでなく閲覧できるような機会を設け、博物館学芸員を招待してギャラリートークのようなものをしてよかったのかもしれない。複製の地図は、広島在住の皆さんには懐かしさや親近感がある地名があるためか、熱心に見ながら歓談される方々をよく見かけた。



調査ノートと地図の展示場所は数歩分離れていたが、そこを行き来してみる方もいらしかった。

また、芳名帳等によれば、資料に関係する方々（ご遺族など）のご来館も多く確認できた。例えば、資料の旧蔵者である秀敬氏のご関係の方々と思われるお名前を多くお見掛けし、秀敬氏との親愛や尊敬の関係を垣間見る気がした。

大変に喜ばしかったのは、この展示期間中に、当時の地質学教室の今村外治教授、小島丈児助教授、秀敬氏の係累の皆様が一堂に会することができたことである。秀敬氏のご子息でもある、広島大学医学部の秀道広教授のご配慮もあって、某日、ある一室に集まって旧交を温められたほか、ご自宅にある貴重な資料をお持ちくださって拝見することもできた。展示を企画したものとしては望外な幸甚だった。この、資料が生まれた場所（地域）で展示活動をする意義をまた再確認した次第である。

更に、広島大学地質学教室が当時爆心地付近を案内した、日本学術会議の調査班のリーダーであった渡辺武男に関する研究の第一人者・田賀井篤平東京大学名誉教授（東京大学総合研究博物館特招研究員）も来てくださった。本件の専門家にお見せするには拙すぎるものではあったが、温かいご教示を多く頂くことができた。また同時に、広島に本件に関する研究者がいて、同席され、学術的な交流ができれば有益であったと感じた。

以上のように、地域の学術研究の歴史に関連する学術研究資料展示は、

- ・地元（地域）の皆さま
- ・資料旧蔵者の関係者（ご家族ご親戚）
- ・資料旧蔵者と学術研究的につながる方々の関係者との出会いや再会をうながすきっかけになり、場合によっては、学術と社会の交流の場、あるいは研究交流の場を提供する可能性を持つ、ということを実感した。

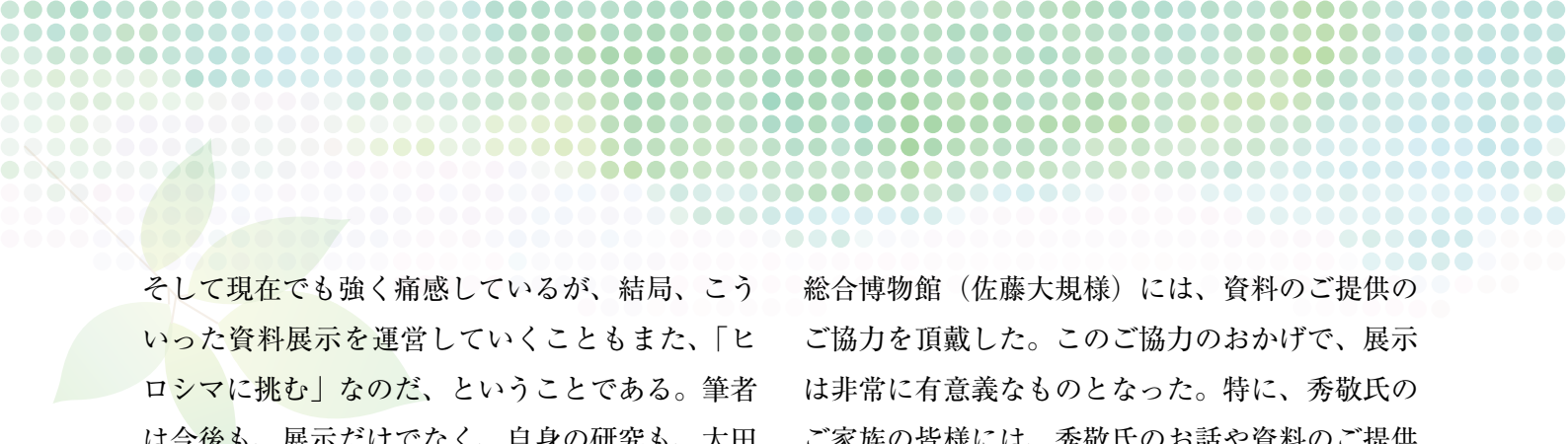
なお、筆者は展示に際して、多くの先行研究を参照し、資料分析を行った。そして自身も本件の調査研究をベースに第60回原爆後障害研究会で関連報告を行い、論文とした（「広島における放射線被ばくの研究と医療：第1回原子爆弾後障害研究会への文脈」『広島医学』73(4)、pp.271-276、2020年4月）。担当の研究者が、自身の専門（アーカイブズ学、科学史資料、原爆関係資料）の研究成果ともつなげつつ、展示運営を行う、というのもまた、研究所に属するアーカイブズ部門の役割であると感じ、今後も邁進したいと考えた。

4. 今後の課題

今回の展示は、今まで扱ったことのない地質学資料（岩石資料などタイプの違う資料、医学以外の学術資料（医学資料にはあまり見られないフィールド調査資料）がテーマに入ったことで、今までとは違った体験ができ、学びも多かった。また、原爆の医学研究は、こういった地質学や物理学と言った他分野の研究成果を利用している部分も多くあるため、「原爆」という大テーマのもとで、こういった複合的な展示を企画することも有益であることがわかった。但し、展示に際しては、その分野の調査や基礎的な知識の勉強をすることが、展示の責任としても重要であり、その点は留意すべきと考える。ただ、こういった複数の学術分野の展示の可能性は今後も検討していきたい。

また、例えスペースが小さく、文字が過多の見づらい展示であったり、「被爆岩石」というような重要で象徴的であってもなかなか身近で触れることができない資料の展示に対し、実は逆に、時間をかけてじっくり落ち着いて見たい、という方々のニーズがある、というのもわかった。せっかく足を運んでくださる皆様のなかの、そういった要望にも、今後はなるべく配慮したいと考える。

また、これは本展示の準備のころから終了まで、



そして現在でも強く痛感しているが、結局、こういった資料展示を運営していくこともまた、「ヒロシマに挑む」なのだ、ということである。筆者は今後も、展示だけでなく、自身の研究も、大田洋子さんの言う「ヒロシマ」とは何かを考え、「ヒロシマ」に挑み続けねばならない、と自覚し、今後も尽力したいと考える。

謝辞

本展示においては、広島大学文書館、広島大学

総合博物館（佐藤大規様）には、資料のご提供のご協力を頂戴した。このご協力のおかげで、展示は非常に有意義なものとなった。特に、秀敬氏のご家族の皆様には、秀敬氏のお話や資料のご提供のほか、様々なお心遣いを頂戴した。心より御礼申し上げます。また、広島大学医学部、同医学資料館には例年通り、直接的なご支援を頂戴した。また、放射線災害・医科学研究拠点にも引き続きご理解とご協力をいただいた。末尾ながら、深く感謝を申し上げます。